

鉄砲史研究

第1号

種子島伝来銃についての考察
ポルトガルの東方進出史

所 庄 吉
有 馬 成 甫

昭和43年6日
銃砲史学会編

種子島伝来銃についての考察

所 莊 吉

鉄砲伝来の意義及び年時について従来数多くの発表がなされているが、初伝の銃そのものについてはあまり問題にされていない。これは資料が乏し過ぎるのがその理由であつたらうと思われる。その為殆んど無比判に初伝の銃をしてポルトガル製と考へ、甚しきは直接ポルトガル本国との接触が行われたとの誤解が今なお払色されていない。しかるに昭和三十九年朝日新聞紙上で飯塚浩二氏か初伝の銃は西洋系ではなく、トルコ系ではないかとの問題を提起された。飯塚説の骨子は、和銃の火挾が前方へ落ちる点に注目され、これと同様の形式は、趙士禎の著わした「神器譜」に所載された魯密銃に見られ、ヨーロッパの銃の火挾が手前に倒れる違いから、ポルトガル製と伝えられた初伝銃は、ヨーロッパ系ではなくポルトガルから日本へ来る途中で入手したトルコ系の銃ではなからうかということである。

たしかに初伝銃がポルトガル製ではないのではないかということに疑問を持ったことは面白い見方であるが、和銃とルーム銃との違いに大きな点がいくつあることを見落されているようだ。例えば和銃では火挾の位置が側面であり、開放時には倒れていて引金とは別の部品になっている。昭門の位置は火皿より前方にあり、殆んどがオープンサイトになっている。また銃床は短かく頬付で射撃をするようになってゐる。特に重要な違いはその点火機構が急速点火式になっている。

それに比べてトルコ系の銃では、火挾の位置が銃の中央にあり常時起き上った状態にあり、引金とは同一部品であるS字形式である。照準具は銃身後端にあつてピープサイドが多い。また銃床は長く現代銃のように肩付で射撃を行うようになってゐる。点火様式はスローダウン式で、最も初期の火繩保持具から多少進んだ程度である。

銃 砲 史 研 究

第 2 号

銃砲史学会の新しい進路について

火薬は誰が発明したか（別冊）

南坊平造

ポルトガルの東方進出史第二回

有馬成甫

青圃文庫収蔵西洋兵書目録

昭和43年7月

銃 砲 史 学 会 編

銃砲史学会の新らしい進路について

御 挨拶

文学博士 有馬成甫

この岸記念体育館がまだお茶の水にありました頃（オリンピック大会以前）われわれ同好者が集まりました。銃砲の歴史的研究会を毎月開催しておりました。その研究の範囲は狭いものでなく相当広汎に亘りました。

- (一) 日本古流砲術の復元及び保存
 - (二) 古銃砲の保存、その歴史的探求
 - (三) 幕末輸入欧米銃砲の彙集並に沿革史
 - (四) 日本銃砲史の研究及びその特異性
 - (五) 世界銃砲史の研究、並びに日本との関連
 - (六) 幕末維新に於ける争乱と銃砲
 - (七) 日本の近代化と銃砲史
 - (八) 日本古来の文化と銃砲史
 - (九) 明治百年史と銃砲史
- などと、個条を挙げれば沢山ありますが啓蒙運動として実施していませんのは、
- (一) 古流砲術の実演
 - (二) 銃砲展覧会の開催
 - (三) 研究論文及び図書が発行

銃 砲 史 研 究
第 3 号

唐津城趾の南蛮大砲に就て

福地復彦

ポルトガルの東方進出史 第五回

有馬成甫

青圃文庫収蔵兵書目録

昭和43年9月

銃 砲 史 学 会 編

銃 砲 史 研 究
第 4 号

幕末の洋式銃について 第一回

海軍火薬事業沿革

ポルトガルの東方進出史 第四回

所 庄 吉

有 馬 成 甫

有 馬 成 甫

昭和43年10月

銃 砲 史 学 会 編

古式銃砲につらて

第一回 所 莊 吉

銃の発達には長い年月をかけて漸次改良を積重ねられてきたもので、その本質そのものは五〇〇年前火繩銃が生まれたときすでに完成されたものであつた。即ち今日の銃が銃身・撃発装置・照準具・銃床によつて組立てられていると同様の部分によつて組合されている。唯その発達の過程において前装から後装へ、滑腔から施条へ、火繩式から燧石式そして雷管式へと変つてきたのである。それらの発達は必ずしも段階的に進んできたのではなく、例えば後装式の考案は一五世紀に生まれたが、工作技術の拙劣さから充分の機能を果し得なかつた。またライフルも十六世紀には実用化されているが、これが命中精度の向上に大きな役割を果すことが科学的に実証されたのはやはり十九世紀に入つてからである。この十九世紀と呼ばれる時代は、産業革命の後を受けて工業技術が大躍進を遂げた時で、新しい発明や発見が続々と生み出された。

兵器についても、ナポレオン戦争以後、普墺戦争、南北戦争、独仏の抗争等は特に火器の発達に多大の影響を与え、重工業の発展の索引力となつた。僅々二〇年の間にゲベル銃等の前装滑腔式の単発銃からスベンスキーやヘンリーの如き完全薬莖を用いた後装連発銃が作り出され、またモーゼル銃や日本軍隊の制式銃であつた三八式や九九式の祖形ともいふべきドライゼー銃・シヤスポー銃が現われたのもこの十九世紀の中葉である。勿論ゲベル銃から一足飛びにスベンスキーやドライゼーが考えられた訳ではなく、その間には幾千幾万にも及ぶ各種の着想が取捨選択された結果であるのはいうまでもない。かくて世界の各地各時代にしばしば何の関連もなく生まれた着想が結び合ひ、理想的な銃の完成に近づいたのは丁度一〇〇年前程前である。

折りしも維新変革の騒乱期を迎えた我国では三百諸侯が争つて銃器の購入に努めたため、イギリス・プロシア・フランス・オランダ・ベルギー・オーストリア・アメリカ等欧米各国の新式銃から廢銃同様のもの迄

銃 砲 史 研 究

第 6 号

青圃文庫收藏西洋兵学書目録 第三回	ポルトガルの東方進出史 第六回	幕末の洋式銃 第三回	下瀬火薬製造所沿革
	有馬成甫	所 庄 吉	有馬成甫

昭和43年12月

銃 砲 史 学 会 編

学会員にのみ配布

無断転載を禁ず

下瀬火薬製造所沿革

有馬成甫述

下瀬火薬は、海軍技師工学博士下瀬雅允氏の發明せる高勢爆薬である。

同氏は安政六年（一八五九）十二月十六日、広島府の鉄砲町に生れた。父は芸藩士下瀬徳三助憲章、母は同藩小川幾三郎の女モトである。

明治十年（十八歳）上京して工学寮（後の工部大学）に入学し化学教授エトワード・ダイヴァース等につき化学を修めた、明治十七年（二十五歳）首席を以て同寮を卒業し、次で海軍三等技手に任じ、兵器製造所勤務を命ぜられた。

そうして製造科長原田宗助大技監のもとで第六工場係となり、爆薬の研究を命ぜられた。

当時フランスの「チエルバン」が「メリニット」を發明して、世界の注目を集めていたので、自然研究の目標がそれに集中されたことは勿論である。

研究中災害に遭ったことは一再に止まらなかつた、明治二十一年夏、導火薬たる電酸水銀の製造中、誤まつて攪拌棒が既成薬に接触して爆発を起し、容器の破片が飛んで両手を傷け左手頸は動脈を切つてブラ下る程の重傷であつたが、軍医總監高木兼寛（後男爵）等の手当により同年十月には退院して再び研究を続けることが出来た。

明治二十四年には下瀬火薬実験中、發射試験にて膳発を起したのである。

斯くて氏が海軍造兵廠（芝区赤羽旧有馬邸）に於て明治二十年より研究に従事せる爆薬は明治二十一年六